

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：24505

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K17512

研究課題名(和文) 特別養護老人ホームで暮らす認知症高齢者の日常生活で抱く自己を価値づける意識の構造

研究課題名(英文) The Structure of Self-Valuing Consciousness in Daily Life of the Elderly People Living in Nursing Homes with Dementia

研究代表者

秋定 真有 (Akisada, Mayu)

神戸市看護大学・看護学部・助教

研究者番号：20738546

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、人生の統合を支える看護援助モデルの構築に向けて、まず、特別養護老人ホームで暮らす認知症を有する高齢者の生きる支えを明らかにすることである。

特別養護老人ホームで暮らす認知症を有する高齢者を対象にインタビュー調査を実施した。分析結果より、特別養護老人ホームで暮らす認知症高齢者の生きる支えとして、「安心し過ごせる日常が保証された環境」、「老いる自分を容認する心」などの6つのカテゴリーが抽出された。これらより、認知症高齢者が生きる支えをもちながら自分らしく生きるためには、特別養護老人ホームが自分の老いを見つめながらも、最期まで安心して暮らせると感じられる場である必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症看護において、認知症は進行性の疾患であることから、症状が進行すると本人の認識や思考、感情といった意識が把握しにくいという課題が挙げられている。本研究によって、特別養護老人ホームで暮らす認知症を有する高齢者の生きる支えを明らかにすることは、当事者の視点から認知症を有する高齢者の生きる支えが示されることとなる。そして、看護職は、認知症を有する高齢者の生きる支えを知ることによって認知症を有する高齢者が人生の統合を目指して最期まで自分らしく生きるための援助の示唆を得ることができると考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to first identify the living supports of elderly people with dementia living in nursing homes in order to construct a nursing assistance model that supports life integration.

An interview survey was conducted with elderly persons with dementia living in nursing homes. From the analysis results, Six categories were extracted as the supports for living for elderly people with dementia living in nursing homes, including "an environment that guarantees a secure daily life" and "a heart that accepts one's own aging". These six categories are "an environment that guarantees a secure daily life" and "a spirit of accepting one's own aging". The results suggest that nursing homes need to be places where elderly people with dementia can look at their own aging and feel that they can live in peace until the end of their lives.

研究分野：老年看護

キーワード：認知症高齢者 特別養護老人ホーム 人生の統合

1. 研究開始当初の背景

我が国においては、急激な高齢者人口の増加に伴い、認知症高齢者の増加が見込まれており、団塊の世代が75歳以上となる2025年には、700万人になることが推計されている(厚生労働省, 2015)。国の施策としては疾病や障害をもっても最期まで住み慣れた地域で暮らすことを提唱し在宅療養が推進されている。一方で、終の棲家である特別養護老人ホーム(以下、特養とする)は2014年現在で7,982施設整備され(厚生労働省, 2015)、人生の最期を特養で過ごすことを望む高齢者とその家族は多い。

平成27年の介護報酬の改定により、特養新規入居者は原則要介護3以上と限定され、今後ますます要介護度は高くなり、重度化すると考えられる。(厚生労働省, 2015)。また、入居者の約90%は、認知症高齢者の日常生活自立度ランクII(常時介護が必要とされる)以上であり(厚生労働省, 2015)、特養で暮らす認知症高齢者への看護援助ニーズは高い。

研究者はこれまで、高齢者ケア施設(特養、介護老人保健施設、療養型医療施設)の新任期看護師に強化が必要な看護実践能力を育成する教育支援方法の創出に関する研究に研究分担者として参加している。その研究においては、認知症を含めた複数の疾患を抱える高齢者の症状に捉われるのではなく、高齢者の尊厳を護るという看護の本質に目を向けるための教育支援が必要であることを明らかにしている(Akisada, et al. 2016)。すなわち、認知症高齢者の看護援助において、尊厳を護りながら人生の統合を支えることの重要性が示されている。

生涯発達理論においては、人生の最終段階である老年期にある人々も発達し続ける存在として捉えられている(Erikson, 1963; Havighurst, 1972)。Eriksonによると、絶望と統合のバランスをとりながら生きる老年期の発達課題に直面する高齢者は、人生の統合に向けて自身のこれまでの人生を自己評価し、価値観と人生の目標を再統合していくことが必要となるが、このような転換がうまく行われなければ、精神的危機に陥ることもあるといわれている。特養に入居する高齢者は、住み慣れた家で家族や馴染みの深い人々と生活する環境とは異なる場に身を置き、人生の最終段階を生きている。したがって、看護職者には、生活環境の変化、認知機能、生活機能の低下がある中で、特養に入居する認知症高齢者が自己実現に向け人生を統合しながら最期までその人らしく生きることを支えるための援助を提供することが求められる。

特養で暮らす高齢者への援助に関する研究においては、終末期ケアに関する研究(上田ら, 2016; 祢宜ら, 2014)、意思決定に関する研究(平野ら, 2011; 渡辺ら, 2010)、多職種連携(島田ら, 2016; 長畑, 2015)に関する研究が多く、人生の統合を支える援助に関する研究(青木ら, 2013)は少ない。

人生の統合を支える援助に関して、小野(1997; 2001)によって、老人病院に入院中の高齢者を対象とした自己発達を促進する看護援助の構造に関する研究が報告されている。高齢者が自己実現を目指して自己発達するためには、自我を脅威にさらさない援助が基盤となり自己肯定促進への援助が続くこと、高齢者と看護職者との相互援助関係が重要であると同時に、看護職者が高齢者の自己実現に大きな影響を与えることを明らかにしている。また、青木らは、マズローの欲求段階説を用いて、認知症高齢者のニーズからその人らしさを支えるための援助を検討し、低次の欲求を優先して満たす重要性とその際にも高次のニーズを満たすことを念頭に置いて援助する必要があることを示している。

一方で、高齢者が自己実現に向けて老いを生きようとすることについては、自らの老いることの日常生活での意味づけが重要(沖中, 2011)とされている。さらに、介護老人保健施設や在宅で暮らす高齢者を対象とした研究においては、高齢者が自らを価値づけ意識するのは、生活する場やその場で自分を取り囲む人との関連が深いこと(服部, 2010; 沖中 2006, 2011)が報告されている。

すなわち、高齢者の人生の統合を支える援助について、高齢者の生活の場の多様化に伴い、それぞれが暮らす生活の場に注目することが必要と考えるが、特養に注目した研究報告はない。加えて、これらの自己を価値づける意識に関する研究においては、認知症高齢者に焦点を当てたものはない。

したがって、本研究では、特養という生活の場に注目し、人生の最期を暮らす認知症高齢者が日常生活の中でどのような思いを抱き、そこで自らをどのように捉え、価値づけ生活しているのかを明らかにしたいと考えた。それによって、特養という生活の場で人生の最期を生きる認知症高齢者により特化した人生の統合を支えるための具体的援助を導くことができると考えた。

認知症高齢者については、すでに、中等度～重度の認知症があっても自分自身について話すことができ、認知機能の低下を自覚しながらもその人なりに対応していることが報告されている(高山, 水谷, 2000; 2001)。また、永田(2013)が認知症ケアにおいて重要なことは、「当事者がもっとも伝えたいこと、関心のあること、当事者にとって本当に必要なことは何かを、本人とともに明らかにしていくプロセス自体が重要」と述べている。したがって、認知症をもつその人自身の体験を明らかにすることが必要である。海外においては、スコットランド認知症ワーキンググループに代表されるように、認知症の当事者自身が施策づくりに積極的に参画するなど

の取り組みが進んでいる。日本においては、2014年、認知症当事者メンバーによる「日本認知症ワーキンググループ」が発足した。このグループは、認知症の人と社会のために認知症の人自身が活動していくことを目的として活動している。このような活動においては、認知症をもつ当事者自身によって語られる日常の体験より、記憶障害に伴う苦悩や周囲からの認知症の理解と当事者本人の体験の違いが理解でき、認知症看護においても、援助する側の視点ではなく、当事者本人の体験を理解した上での看護援助が求められているといえる。

したがって、人生の統合において日常生活における自己の価値づけが重要とされる上で、看護職が、認知症高齢者自身が日常生活の中で自己をどのように価値づけているのかを知ることが、認知症の人々を理解する一助となり、認知症高齢者の人生の統合を支える上で重要なプロセスであると考えた。

そこで、本研究では、人生の統合を支える看護援助モデルの構築に向けて、特養で暮らす認知症高齢者の日常生活で抱く自己を価値づける意識の構造を明らかにすることを目指したい。

2. 研究の目的

本研究の目的は、人生の統合を支える看護援助モデルの構築に向けて、特別養護老人ホームで暮らす認知症を有する高齢者の自己を価値づける意識の構造を明らかにすることである。

3. 研究の方法

1) 研究テーマの明確化とインタビューガイドの作成

国内外の文献検討により、自己を価値づける意識の構成概念の定義を明らかにし、研究テーマの明確化、研究方法の洗練とインタビューガイドの作成を行う。

2) 特養で暮らす認知症高齢者へのインタビュー調査の実施

①研究対象者：

研究協力施設で勤務する看護部長および高齢者看護の経験が5年以上ある看護職に依頼し、下記条件に該当する65歳以上の認知症高齢者10名の選定を行う。特養に入居時点で認知症のタイプの診断まではついていない現状が多いことから認知症のタイプは、特定しないこととする。

(1) 入居後6か月以上経過している高齢者。

入居後間もない不安定な時期を避けるため、先行研究1) 2) で示す入居適応期間2~9週間を目安に入居後6か月以上経過していることとする。

(2) N式老人者用精神状態尺度(寝たきり老人でない場合)で軽度~中等度(17点~47点)であり、言語的コミュニケーション可能である高齢者。

先行研究3) 4) において、中等度の認知症があっても自らの体験や思いを語ることができること報告されていることから、本研究の対象者は、軽度~中等度の認知症高齢者とする。

(3) 本研究の対象者に選ばれたことで不安や混乱状態になる可能性が低い高齢者。

(4) 治療中の急性疾患がない高齢者。

②データ収集方法：

研究対象者の身体的、精神的状態に十分に配慮したうえで、日時の調整を行い、半構造的インタビューによりデータを収集する。

③分析方法：

(1) 特養で暮らす認知症高齢者の日常生活で抱く自己を価値づける意識の抽出

逐語録より、特養で暮らす認知症高齢者の自己を価値づける意識に関する部分を抽出しデータとする。質的記述的分析法を用いて、意味内容を損なわないよう類似性に基づき分類・整理、カテゴリー化し、特養で暮らす認知症高齢者の日常生活で抱く自己を価値づける意識を明らかにする。

(2) 特養で暮らす認知症高齢者の日常生活で抱く自己を価値づける意識の構造化

分析によって抽出されたカテゴリー間の関連性を検討し、特養で暮らす認知症高齢者の日常生活で抱く自己を価値づける意識の構造を明らかにする。

4. 研究成果

研究の目的は、人生の統合を支える看護援助モデルの構築に向けて、特別養護老人ホームで暮らす認知症高齢者の自己を価値づける意識の構造を明らかにすることであった。

しかしながら、文献検討において研究テーマの明確化を行う中で、老いを生きる高齢者は、人生の統合に向かって自分らしく生きるために、生活する場や自分を取り囲む周囲の人々との関係の中で、自らの生と死について考え、生きる意味を探し生きる支えをもちながら過ごしていることが明らかとなった。このことより、人生の統合に向けて、最期まで自分らしく生きるためには、どのような生活の場においても自分らしく生きる支えをもつことが重要であることが示唆された。そこで、本研究においては、当初の研究目的を変更することとした。したがって、本研究の目的は、人生の統合を支える看護援助モデルの構築に向けて、特別養護老人ホームで暮らす認知症を有する高齢者の生きる支えを明らかにすることである。

文献検討より、老いを生きる高齢者は、人生の統合に向かって自分らしく生きるために、生活

する場や自分を取り囲む周囲の人々と関係の中で、自らの生と死について考え、生きる意味を探し生きる支えをもちながら過ごしていることが明らかとなった。そこで、本研究においては、人生の統合を支える看護援助モデルの構築に向けて、まず、特別養護老人ホームで暮らす認知症を有する高齢者の生きる支えを明らかにすることとした。

特別養護老人ホームで暮らす認知症を有する高齢者を対象に複数回のインタビュー調査を実施した。インタビューデータの分析結果より、特別養護老人ホームで暮らす認知症高齢者の生きる支えとして、「安心して過ごせる日常が保証された環境」、「老いる自分を容認する心」などの6つのカテゴリーが抽出された。これらの分析結果は、認知症を有する高齢者が生きる支えをもちながら自分らしく生きるためには、特別養護老人ホームが自分の老いを見つめながらも、最期まで安心して暮らせると感じられる場である必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 秋定真有, 坪井桂子
2. 発表標題 特別養護老人ホームで暮らす認知症を有する高齢者の生きる支え
3. 学会等名 日本老年看護学会第25回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 秋定真有
2. 発表標題 特別養護老人ホームで暮らす軽度の認知症を有する高齢者の生きる支え
3. 学会等名 2020年度第25回老年看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------